製藍集說

全

特1
1870

国立国会図書館　タイトル『製藍集説』 請求記号 特1-1870

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『製藍集説』　請求記号　特1-1870
ガラス使用

製藍集説

名稱　阿為本艸和名○藍實和名阿為乃美とあり多天阿井和名類聚抄

あゐとで蓼藍新修本草小藍萬病回春蓼靛物理小識蔓正字通深

青草江南通志青秧農圃六書大青醫學正傳

POLYGONUMCHINENSE羅甸名○春別亇孤氏の書ヨ拠ル

林娜斯氏八綱三目

垤甘度尔列氏蓼科

形狀

一年生の草なり葉形蓼の如くして濶大楕圓形

国立国会図書館　タイトル『製藍集説』 請求記号 特1-1870

ガラス使用

特1－1870

にして少しく其先尖り大に尖れるあり蛋形なるあり并に下品とス
莖に互生ス夏月梢及枝葉間に穗を成し五瓣の
細紅花を開く其花蓼花に同し花衰へて子を結
ひ其色倍紅なり其高一二尺なるを常とス其培
養足れる者ハ三四尺に至る

稱佳園稿箋

国立国会図書館　タイトル『製藍集説』　請求記号　特1-1870
ガラス使用

稱住園稿箋

国立国会図書館　タイトル『製藍集説』　請求記号 特1-1870

ガラス使用

百貫藍 方言

多種有りと雖精好

なる者ハ此種ニ限れり

放大圖

国立国会図書館　タイトル『製藍集説』　請求記号　特1-1870

ガラス使用

創始

藍をもつて染料と為せしこと其始を詳にせず古事記上巻曾迩止里乃青支美介志の語あれハ藍色の來る亦久し然れとも上古多く鴨跡草を用ゐしこと見えされハ其後の青色も亦何物に資

稱佳園稿箋

れるを知るへからん其藍を種植し及ひ深用に
供せること史傳に於て未見ん必秦氏帰化八百六十
年代の後曇徵能く采色を作るかと見えさる前か
るへし縦上世より有りとも必纔に藍葉にて揩
り或ハ煎して深る等の事に過きざるべし大寶
養老年間千三百五十年より七十年に至るに至りてハ頗其用法
も詳なりしと見えて賦役令に凡供京藁藍雜用
之屬謂深草縄薊柏槽机篭簀等之類即其所輸者准折雜傜也毎年民部預於
畿内斟量科せ下せと是其官用を民間に課せるをい
ふなり降りて延喜に至りて主計式上に諸國輸

庸一丁云々乾藍三斗三升三合三勺とあるハ蓋
藍葉を乾かして粉碎し斗量せへく作りさる者
と見ゆ然れとも乾藍ハ縫殿寮式に據るに只貲
布一端を染る料に乾藍二斗とありて他の淺深
中淺纈布青緑淺深緑中縹次縹等の青を資るに
ハ用ゐる所藍幾圍とありて徒に乾碎したる者
を斗量せるに非さること著し且内藏寮式に小
許(サミトリ)春羅白綾を染むるに用度生藍八十六圍大半
とあるハ刈り取りたる藍を製して直に用ゐし
者と聞ゆ然れとも深藍色中藍色淺藍白藍とも

国立国会図書館　タイトル『製藍集説』 請求記号 特1-1870
ガラス使用

に黄蘗を加ふるのミにして他の製造を施すこ
とを云ハれ（但深緑を染るに灰をされことを載す）且幾斤と稱せす
しで幾圍と稱するハ多く把束したる名にて又
前の如く斗量を以てせさるを見れハ粉末にも
非さるなり是内藏寮別に培養して新鮮なる葉
を用ゐて染しことハ同式に營藍陸田五町惣單
功九百九十二人別米二升塩二勺海藻二兩功錢
（臨時量充）鎣二口塩二勺海藻二兩功錢三十口（三年一請）藍
種始蒔日祭神料五色絹各二尺雜魚脂二斗塩四
升海藻六斤白米二斗酒二斗鮑六斤堅魚六斤と

稱佳園稿箋

是此篇に用無しと雖昔時より種藝の難かりし
故に祭典ある者にして其重くせしこと祈年祭
の如くならはと雖此他未植物の為に祭祀する
を聞かは而して其陸田何處に在りしか茶山梔
の如きも（茶園西宮記拾芥抄に載す支子園式及に載す）別に公園あ
れハ必其地を定められしなるへし其後何如な
りしか藍を云ふ者只播磨飾磨を稱す飾磨の藍
有名なりしハ詞花集（戀下）新續古今集（戀三○時代後なれと俊
成卿なり）新撰六帖（六）夫木抄（雜）等に見えて寛治年間
より前已に歌詠にも入りしなるへし又飾磨の

国立国会図書館　タイトル『製藍集説』　請求記号 特1-1870
ガラス使用

藍園ハ官園となりしなと云ふ者あれと是堀川後百首に源兼昌か「かち染る志かまの御園かれはてゝあひ見て過る神奈月かな」の歌に據れるなるへけれと此御園ハ萬葉集に載る所御園生のからある云々に據りてよめるなれハ只常の園をいふのみなり其飾磨の藍ハ北村季吟の注にしかまハ播磨の名所なりかちとハあゐを杵にてつくものなり（按に搗栗の搗の如し）と秦石田の播州名所巡覽圖繪（四）に飾磨搗染當津細江町に紺屋多して古代より相續の者も有るへけれと染法

稱佳園稿箋

今精く傳へさる家なし按に只幾度も藍に染めて臼にて搗(カチ)て唯厚(コ)く染さるなるへし臼にて搗をかつといふ餅を搗(カチ)飯(イヒ)と云ふにて知るへし濃き藍染のこと歌にて志るへし」と後世武家故實中に勝色を用ゐるハ之に因れるなり且元亨建武の際にも北畠玄恵か庭訓往來に染殿紺搔の字あるハ都下にても其法を得しなるへし年間の七十一番職人歌合にかうかき「志かま川あふせもいつと契らぬにあなかち人のこひしかるらん」の歌ありて猶飾磨の語を用ゐるを見

れハ元亨建武間の紺ろきも享徳年間のかうろ
きも共に播磨の法に據りしなるべし

稱佳園稿箋

○藍圃耕耨

大寒より立春に至るを期として其圃牛馬を使ひ馬把を以て縱横に土を墾(コナ)し深く耕すをよしとす其後鍬を以て土を細に碎き石塊草根等を拾ひて棄つ長さ二間許の細き竹を持ち地面を平に均(ナラ)し畦を作るに其幅毎に一間許土を堆(モ)り種床(タネトコ)とす之より先預藍實を桶ノ水中に浸し置き日を經ること十日或半月にして其實を笊(サル)の中に入れ水を滴り去りて竈中の灰を合せ拌せ之を撒く撒き終りて竹把を以て縱横に舒々(ソロソロ)之を

抓く其上に竹の篩を以て砂を篩ひかくへし但
し土并實の見えさるに至りて遍く足を以て之
を踏む其上に甘蔗(サタウ)根(モト)邊の籜(シブ)或ハ麥稈を以て遍
く之を覆ひ上に竹木の長き者を横たへて鎮(オモリ)と
し風の吹捲くを防く又藍實を鳥雀に食ハるゝ
か故に之を防くへし（案山子を立て又鳥羽及紙片を垂るもよし）多く
ハ引板を張る所謂鳴子なり板を尺許に断ち竹
を吊(ツ)ること五六本之を竹竿の先に着け風に靡
きて鳴るへく作り苗床の所々に立て置くへし
凡藍實ハ細微なる者なから鳥雀の嗜しむ者と

稱佳園稿箋

を
日を經て後床の中の土を擽けて芽を出さんと
れ之を見て上に蓋へる者（前に所謂甘蔗の籜麥稈及鎮の木枝）を
去るそれより幾日を經をして甲拆(カヒワリ)葉(ハ)を生れ藍
實偏(カタヨリ)て繁密なる者ハ嫩葉の時より（上に筵を敷き坐して疏密を驗るなり）
をて之を疏ひさて其初ハ油滓を臼にて舂
き碎細ならしめ之を細目の竹篩にて篩ひ之を
嫩苗に遍く撒(フリマキ)し其上に肥土を篩ひ被(カ)く（前の竹篩にて）
是亦油滓の覆をれて見えさるを度とし
又苗五分許に長せハ畦の左右に枕を置き其上

ニ梯子を架し其狀橋の如し苗ニ近つきて而も苗を傷せさるか為なり梯子上ニ板を敷き其上ニ坐して又苗を疏(マビク)(ウロマキ)し且隨て塵を拾ひ雜艸小石を去る而して後ニ人糞ニ多く水を和し苗の上より澆くへし又鰽白(ニシン)魚の油滓を碎き竹篩ニて篩ひ毎一坪一升許の比例ニて肥土ニ混し苗の中へ手ニて撒くへし其上より右の魚肥の隱るを度として河水中の砂を撒くへし又雨の降るを候ち水肥水を多くせし薄肥を藍苗の上より遍く澆くへし又乾鰮を四斗樽の中ニ入れ水を多く加へ置き其滋液の融化するを待

稱佳園稿箋

ち又之ニ水を加へて又苗の上より澆くへし若シ又久しく旱するニあらハ朝夕毎ニ一度水を澆くへし然れとも前澆ニ澆きさる肥を吸盡さしめハ魚肥を施すを要せ此の如く肥を用ゐれハ藍苗漸々肥大ニ趣くへし肥大ニ趣けハ葉莖茂暢するを以て又之を疏し疎(マハラ)なる所あらハ拔きさる苗を其所ニ補ひ雜草を拔去るニ注意すへし苗已ニ一寸五六分ニ至れハ必蟲を生れ勉めて此蟲を除かさるときハ動もすれハ嫩芽を食盡すニ至るハ子ムシあり好えて嫩芽を食ふ又

裏蟲あり是ハ葉背に生し時々検査して拾ひ捕るべし否れハ并に皆藍苗の大害を為す且蟲を除くには煙草の茎（實ハ茎に非す烟草葉の中心の葉管なり烟を剉むに心之を剥き取り茎と稱す）を水に浸し色赤黒にして辛辣なるに至りて草箒の軟かなる者の末に醮し（地膚にて作れる尋常の草箒なり）藍苗を洗ひながら擦れバ其蟲を殲すべし而して日々蟲を除き肥を施し水を澆き且魚肥を施すなり凡小苗を抜き蟲を去るにも両邊に枕を置き上に梯子を横架し橋の如くして上に板筵等を布き其上に在りて處置すべし又烏蟲

稱佳園稿箋

と稱する蟲を生す此蟲ハ土中の肥より生し苗の根を食ひ忽ちに之を枯らし故に其枯さる苗の下にハ必此蟲居ると知り竹串の尖を利くし其尖にて刺し（藍苗の萎れさる下を刺すなり）之を集めて遠所に棄つべし但手にて之を探るとも取り易けれど苗根を搖して藍の為利ならし故に竹針を用ゐるなり然れども甚迂ならし此の如くして三月にも及べハ苗長して八寸許に至る此時之を移し植るなり

○移植

国立国会図書館　タイトル『製藍集説』 請求記号 特1-1870
ガラス使用

陸田(ハタケ)ハ多く麥の間ニ植うるなり（大麥小麥皆頗其畦の距離を遠くれ）其畦の幅ハ三尺許其畦の中ニ一尺五寸許の穴を穿ち穴毎ニ藍苗を七八本許分ち栽うるなり

藍苗を苗床(ナヘトコ)より移をニハ手ニて苗五六本許を抜きとり其苗二握許をもって一束とれ（藁二本ニて之を束ぬ）肥桶ニ水を汲入るゝこと八分許苗の束ねさる中邊より上を握り根下の泥土を洗ひ去り又他水ニ入れて再洗淨し根鬚白きニ至りて止む」上の如く七八本一穴ニ栽ゑ直ニ干鰮(ホシカ)の粉を三

稱住園稿箋

指ニて撮(ツマ)ミうけツリガナと稱をる器ニて兩邊の土を劀(ケヅリ)かけ魚肥の隱るゝニ至るを度とれ足をもって苗の本を踏ミ水を注き置くへし翌朝ニ至り又植ゑさる苗の本を遍く踏ミ歩行(アルク)へし三日間日々かくの如く踏ミ固め又苗の臥しさるあれハ竹杖の末(サキ)をもって起し圃中(ハタケヂユウ)を巡檢をへし尤移し植ゑさる第三日ニハ水を搬(ハコ)ひ畦の溝中（四下の部分を云ふ）ニ流をへし（通常桔槔(ハネツルベ)ニて汲むと雖も農用の溝水ある地ニてハ其用水を引き流をも妨けなといふ）尓後(ソノノチ)も暇あらハ日々水を流し入るをよしとれ凡藍苗ハ日を畏るゝこと最

国立国会図書館　タイトル『製藍集説』 請求記号 特1-1870
ガラス使用

甚し故に麦畝と一作オトシに為るなり一作オトシハ畦を隔てゝ別種を執うるを云ふ喩之ハ他の圃に一條の畦にハ菜を蒔一條の畦にハ豌豆を蒔か如く互に隔てゝ二種の者を種るをいふ麦隴の蔭あるに頼りて自日影を遮るか為に此の如く種るなり且其苗を移し栽るに徒に時間を經る時ハ苗萎れて傷む故に自家の人口にてハ其用に足らす皆人を雇ひ且速に井水を流し入ることを為しむるなり（初ハ藍一段に鰽白魚滓三升許にて可なり）植て後三四日を經ても箒を以て蟲を驅ること怠られ其間二日三日を經る毎に水を灌くへし其後麦

稱佳園稿箋

を刈り収めて後鍬を以て其麦の植ゑてありし跡の土を墾し牛馬に馬把を係きて墾さしむ且鰽白魚の油滓を手にて握り之を根邊に施す此度ハ第二次なるを以て一段六斗許を用ゐるなり然れとも其比ハ動もすれハ烏鴉に啄る故に麦隴の土を鍬にて抓き上け掩ふへし其時已に麦隴ハ根を去りて土を墾してある故なるなり麦の土を用而して其外側ハ水を流すに便ならしむ肥を壅し土を苗の根邊に抓き上る毎に藍の嫩根發生して葉色自滋潤し日を逐て茂す其頃より日々點檢して蟲を掃ひ除くへし日午を佳とす

国立国会図書館　タイトル『製藍集説』　請求記号　特1-1870
ガラス使用

一尺許に至らハ箕と箒とを以て蟲を除く箒に
て藍の葉を三四度掃ひ揺せハ蟲下に墜つ故に
箕を以て之を承け蟲を遠所に捨つ又霖雨に遇
へハ蟲葉裏に卵を産ミ皆所謂裏蟲なり殊に葉
背を撿して之を去るへし此蟲藍葉を穿ち嫩芽
を食ひ大に生長を妨く故に困苦勉厲して人々
之を驅除す第三次の培壅ハ一段毎に魚肥一斛
二斗許第四次ハ一斛六斗より一斛八斗に至る
尤藍の肥瘠に隨て増減す此四次の肥を藍の止(トメ)
肥(コヱ)と稱す然れとも其間肥切(シレ)と稱して差瘠状を

稱佳圖稿箋

見ハす時ハ夏の土用前にシンザシと稱して藍
の心へ〈藍一窠を成して植さる心なり葉心に非ミ〉千鰛を手にて握り
うけおくへし但毎一段三斗許にてよし其後に
ハ前の如く鍬を以て土を鋤(ス)きうけ土用前まて
にハ藍の高さ四尺より四尺五寸に至る土用に
入りてより一週間を經て藍を刈り始るなり此
に至るまて天旱に遇ハヽ二日三日間毎に水を
畦間の凹所〈即溝と稱する所なり〉に流注せしめ若(シ)流れ下
りて溜ることなくハ土を以て其流出を防くこ
と甘蔗を植うるに同し

○芟刈（カリイレ）

凡藍を刈り收るには根邊地平より五寸を餘し鎌を以て之を刈る一株を一握にして刈り集めて一大束とし馬に駄して一駄六束許を負はしむるを度とし人は朸を以て二束を擔ぐるを定とし之を搬（ハコ）ひて家に帰り庭の一隅に積む庭は即藍を曝すべき庭にして空濶なること農家の秋場（トリイレバ）より廣し其庭に筵を敷き連ね數十百枚に至る而して其一邊にて藍を剉む剉法は藍の胴切と稱し下邊の赤色なる土葉（ツチハ）（下葉を謂ふ）の所より七八寸許に切り（剉草器（ザキリ）にて切る）之を別にし其上部のこを敷きたる筵の上に攤（ヒロ）け朝九時頃に日光に照らし藍葉萎るゝを見て連枷（カラサヲ）を以て之を打つ其連枷尋常に異なり其柄木にて作り其打つ所は篦を以て五枝を連ぬ（劍客シナヒの如きより竹圖の如し）

右の連枷にて撃てハ五片の竹篦次を逐て下り

稱佳園稿箋

五本の摺扇の骨の如し此連枷を以て撃ち又生藍葉を反覆して之を攤け再三又之を打つ緑葉の黒色に變するに至りて之を日に晒らし乾くを候ちて再又連枷を以て打つこと一遍又上下の藍を反覆して後打つこと一遍而して藍の莖は一隅に拾ひ集め筵の上に碎落せし藍葉を竹箒にて掃き集む之を藍のあら葉と稱す

藍の葉を扒き集るに杷を以てす藍葉製造に用ゐる木杷二種一をハクマと稱し一を四クマと稱し並に全體櫧にて製す此時の用は即ハクマを用ゐるなり

稱住園稿箋

又前の莖を筵の上に攤乾し之を又連枷にて撃ち又翻轉して之を撃つ上の藍の莖をハクマを以て傍に扒き集め又筵の上の葉を箒にて掃き

国立国会図書館　タイトル『製藍集説』　請求記号　特1-1870
ガラス使用

集む之を二番葉と稱す此時の莖を又筵にて乾し連枷を以て之を撃ち又翻(カヘ)して之を打つこと前に同し之を三番葉とし又之を攤けて乾し藍の嫩芽まて打碎きて取るへきゝ為に嫩芽并に殘葉まてとる此の如く四度に及へハ莖のミにりて葉ハ盡く枝に止らす此莖ハ庭隅に堆して乾し薪の用を助く

○以上の諸法之を打葉と名つく打葉の藍を刈るにハ曉二時に家を出て陸田に趣き苅り了りて午前十時の頃帰り其日ハ一日中に其刈りしる藍の葉を收め又午後四時過より再鎌を藍園に攜へ夜八時比まて刈り之を馬に駄し又人も擔けて帰り又翌朝二時より再之を刈り昨夜と今朝の刈れる所を合せて又一日中に葉を收む凡藍を刈るに雨天ハ佳からす又曇天にても宜しからす葉の色を損すること甚し故に晴天に遇へハ孜々勉勵して之を刈る者とす

・切藍

是法ハ藍を刈るに本より五寸許の所を縄にて束ね一把とし以て剉切に便を之を剉むに鉈(ナタ)を

稱住園稿箋

国立国会図書館　タイトル『製藍集説』　請求記号　特1-1870

ガラス使用

以て一鉈ハ長さ一尺二三寸許幅三寸許其刃常の鉈より薄し之ニ五寸許の木柄を施し木砧(キノダイ)を置きて其鉈を以て藍の梢より茎ニ至りて一寸許ニ之を剉む前ニ云へる縄の側五寸許ニ至りて止む（此本の茎別ニ貯ふ）此剉葉を莚の上ニ一般ニ攤け其萎せさる前ニ於て竹箒を以て筵上を掃ふか如くして之を混和し且力を箒ニ用ゐて葉を揉むか如くすへし漸ニ藍葉黒色を帯ふ尤日光の照らし所を善とし度々箒を以て攪せ藍葉の黒色ニ變するニ至る其葉午前十時より午後一時

稱佳園稿箋

ニ至るまてニ乾き黒色ニ變するを度とし一時を過くるまてハ箒を以て手を止めず反(カヘ)し遍く乾かすを要し藍葉黒を帯ひてよりハ拌攪の労少く省かる藍葉乾燥して微濕なきニ至りて之を大なる箕ニ盛りて簸(ヒル)へし（簸方言サゼル）而する時ハ葉の部分箕より出て箕中ニハ茎のミを残す又葉の残れる茎ハ又鉈を以てきさミ箕の中ニ入れて簸する時ハ藍葉先ニ出て茎ハ又後ニ残る之を篩ニて疏し藍梢の微細なる茎ハ篩より落つ之をハ葉藍の中ニ混するとも妨けず又茎も

国立国会図書館　タイトル『製藍集説』　請求記号　特1-1870
ガラス使用

嫩くして用ゐらるつきハ鉈を以て度々剉ミ竹篩にて疏して葉藍に混ずるも亦可なり前に五寸許を残し別に貯へしハ庭に攤ケ乾し連耞を以て撃つこと前の如くし葉ハ篅にて掃ひとり再又其茎を乾し撃つこと前の如く度々葉を取りて残の茎ハ薪とし而して其の藍を本葉（モト）といふ篩ひて砂を去り筵を敷きて之を干し席にて袋を製して俵とし踏固めて充實ならしむ上等藍葉も晒し乾し筵俵に實れ貯ふ

○以上切葉の藍と打葉の藍其製を異にれこの

稱佳園稿箋

故に其直切葉に比すれハ打葉幾許か貴し

○二番藍養法

二番藍と稱するハ一番刈を了りて其株より再芽を出すを其傍より鍬を以て其根の土を削りかけ舊根の傷に闌せれ土を掻き上くへし却て新根を生し茂盛に趣くなり肥ハ下肥に水を和し藍の根邊に澆くなり其茎肥ゆるハ再發の芽なれと長サ二尺五寸許に至る者あり此二番藍を刈るにも亦前の如く一握を刈りて一束とし之を馬に駄して帰り其藍を前の如く切藍とし午

国立国会図書館　タイトル『製藍集説』　請求記号　特1-1870

ガラス使用

前八時九時比より筵の上に攤け竹箒を以て攪せ日に曝して黒色に變せしむること前に同し之を箕にて簸し箕に残れる藍の莖に葉の存せるあらハ又之を切り箕にて簸て竹の篩にて疏し下に落る細き茎ハ日に晒して葉中に雜へてよし

凡藍を蒔て其藍十分に繁茂せしハ舊株より二番葉を生するを少し十分ならすして中出來と稱する藍ハ二番葉頻繁茂する者なり其二番葉を刈りし株に又三番葉を生は之を刈り之

稱佳園稿箋

を晒を法二番に同し

收種

藍の種子を收むるにハ一番よりも二番を佳とし三番亦可なり初番の苗にて種を取る者ハ蒔ゑて十分ならは

藍種を收むるに二番刈の時其子を取るつき度を定め之を養ひて花を出し實を結ゝしむ其種子實せし時之を刈るに葉を刈るに同しく一握を一束とし家の軒下にて雨の降り來るも濡れさる所を擇ひ枯燥するまて之を吊り乾し筵の

国立国会図書館　タイトル『製藍集説』　請求記号　特1-1870
ガラス使用

上ニ置き横槌ニて之を敲き種子を落せ横槌ハ丁字形の槌ニして農家豆莢を敲き子を取るニ用ゐる器なり此の如く其莖を連ねて敲き莖ニ存する葉を取り収めて二番藍の中ニ雜ゆるなり

藍を刈とる舊株ハ鍬を以て掘り起し粟の糞壅となすへし

これより先ニ藍の畦間ニ粟をうゑ其粟の根邊ニ藍の株を寄せ土を掩ふ其根腐爛して粟の肥料となる

稱佳園稿箋

○藍葉窨法(ネセカタ)　今寢の義なり

窨法種々あり藍の精粗ニ由り其法を異ニれ最好の品製造を先左ニ載せ

一床ニ葉藍三百五十貫を定量とれ（一床ハ土人の方言ニして寢さするより出さる語なるへし）其寢板と稱する者松板の厚六分許なるを幅三尺二寸五分長一間ニて裏ニ四所の足を着く（瓦タルキと稱する松材二本ニ切りて四本とし足とれ）此板三十枚許廣庭ニ敷きて隙(スキマ)あらしめれ其上ニ葉藍三百五十貫許を板の上ニ傾け出し（藁俵ニ貯へし藍葉なり）其葉ニ水を洒く其水量ハ藍百貫ニ四斗

許を容るへき荷桶に八荷も洒くなり此故に一床百五十貫の藍にして都へて二十八荷の水を要す其藍葉四ッマを以て抓(カ)き起し反轉して水を洒く其洒くは細かく洒きて一旦に濕潤せしめ（小杓にて霧の如く潑沃(フリカケ)るなり）又偏ならす全體に遍く洒くへし此の如く水を洒きて後之を窨室(子セドコ)に入れて窨(子カ)すへし

○凡窨室は竪二間半に横三間に作れる土藏にして藍を入れさる前其地を作り堅む先ドングハを以て土を掘り起し其上に土を置き之を細

稱佳園稿箋

碎し其土に水を澆(ソヽ)き上に筵を敷き又其上より水を澆き連耞等（常の連耞にて藍の連耞に異なり）の器を以て之を擊ち固め平にすへし其乾かすを庭(シメ)と稱ふ其十分乾きさる後上に擧さる如き藍葉を攤(ヒロ)け上下の窓を閉ち塞き出入の口は猶更に閉ち其精なる者は其初水を澆しより十日許を經るの間度々藍の水を撿すへし其水乾くに過きて枯燥せは四ッマを以て翻轉し又水を澆くへし此時の水は一床毎に八荷許（然れとも燥くに過たるは九荷も亦可）なり其水を澆くこと前に同しく四ッマを以て遍

く反し遍く潤すへし其上を攤け平にして五六日を經る毎に又水の度を撿し水盡く燥き盡さハ又第三次の水を澆く此度ハ八荷にて足れり又七荷にても可なり亦四ツクマを以て度々反轉し水を澆くこと前に同し亦其遍からんを欲す其頃已に秋冷に趣かは（陽暦の九十月）藍葉の上に筵を二枚被(キ)せ（古筵佳なり）藍の鬱蒸の氣弱くハ三枚を掩ふも亦可なり其後五日許を經て四番水を澆く七荷許を度とす然れとも意外水燥きてあらハ半荷を多くすへし又四把にて反し鍤(スキ)を以て下

稱佳園稿箋

より反し濕の遍からんを要す其後ハ高く堆するか為に少しつゝ中心に抓き聚め四方より筵を被(カ)け纏ひおくへし是寒に向ひて藍の鬱蒸を助くるか為なり漸氣候の寒さに随ひて猶筵を四枚五枚の厚さに覆ふへし然れとも其温度(イキリカゲン)を験むるか為に隔日に之を験す若(シ)氣候暖かなれハ鬱蒸必強し其時ハ筵を減し又邊に寒き時ハ筵を增す而して五日を經て又五番水を洒く此時ハ水六荷或六荷半を洒く又四ツクマにて翻轉し藍葉の燥濕に随ひて七荷を澆くこともあるへし

又前の如く莚を覆ふ其四邊よりも莚を纒ふ又五日を經て六番の水を洒く覆ひさる莚を取り除き四ツクマにて反轉し六度の水ハ五荷を洒く然れとも前の如く燥濕に由りて半荷を増す又四ツクマにて反し莚にて覆ひ纒ふこと前に同し又五日を經て七番の水を洒く又反轉すること前に同し但水五荷を洒き或ハ四荷是亦燥濕の候に由りて増減を前の如く鉔にて反し四ツクマにて壟し莚を覆ふこと前の如し又八番の水を澆く亦五日を經て後なり此時ハ水四荷にて可

稱佳園稿箋

なり前の如く杷（クマテ）にて反轉し其中に藍葉塊をなす者あらハ竹篩にて疏し上の四荷の水を漸洒き漸反へハ莚を以て掩ふこと前に同し又五日を經て九番の水を澆く莚を去り杷にて反し鉔（カヘ）を以て下より反し又欝蒸して塊を為す者ハ之を篩し又杷にて反し水を澆く此度ハ三荷或三荷半又五日を經て十番の水を洒く此時の水ハ二荷半にて可なり處置上の如くす又五日を經て十一番の水を洒く水ハ二荷にて可なり其他前の如し然れとも其頃よりハ殊に藍葉堆中に

国立国会図書館　タイトル『製藍集説』　請求記号　特1-1870
ガラス使用

手を入れ其欝蒸の温度を試みるべし又五日を經て十二番の水を洒く此水ハ一荷半を常とす然れとも又藍の燥濕ニ因りて二荷を洒くも可なり又藍葉の形勢を察し十分の成熟と見做さハ常の如くして可なり若意の如くならさる跡(ケンセキ)を見ハ極上酒二升許口ニ含ミ之を噴(フ)くべし此の如くすれハ大ニ藍色を挽回すべし又五日を經て十三番の水を洒く一荷の水ニてよし若(シ)藍の腐(クサリ)の若(ワカ)き（未成熟の稱なり）時ハ又半荷の水を増すべし又五日を經て十四番の水を澆く此時ハ水半

稱佳園稿箋

荷なり（又時ニより一荷を用ゐ又時ニより噴水ニてもよし燥濕ニ隨ふ）之より五六日を經て仕舞水と云ふ即十五番の水なり覆ひし筵纏ひし筵を盡く去り鍤ニて反し杷ニて墾すこと前ニ同しく篩ニて疏し水半荷を澆き藍を反轉し又四邊より抓き集め高く積ミ重ね上より筵を覆ひ四邊よりも筵を纏ひ繩を以て下より上ニ至り其筵を纏ふ仕舞水を洒きて後ハ九日十日間其まゝニ置くべし然れとも其間二日三日間ニ筵の間より手を入れて其水の燥きしを試みるべし之を水キレと稱す七日八

日或十日餘を經て水きるゝことあり其時筵を去り四把にて反轉し鍬を以て反し冷(サマ)をへし冷て後之を筵のカマスに入れ量を試るなり

是其初藍葉三百五十貫を窨し蒅(スクモ)に作り（蒅ハ葉よりして成れる稱）二百四十貫より五十貫許なるハ至極精好無上の藍とは初窨(子カ)してより蒅の成立まて九十日九十五日百日許を經るなり

○搗藍

搗字是かちの名の起る所以にして藍制造の一大要件なり此臼ハ經三尺三寸許深(サ)八寸許臼の

稱佳園稿箋

底平坦に作る（尋常の臼ハ底圓く窪めり）杵ハスリギ子と稱せる杵にて磨り後に角杵(カクキ子)を以て舂く其杵櫧にて作り其尖鐵を纒ふ（ハグチの鈷(カナ)と稱も）形方にして其重量四貫許あり一臼に容るゝ所藍四貫其中に砂一貫六百匁を加ふ

此砂を用ゐること古來製藍の書之を説かす蓋之を秘せるか將之を須要の者と知らさるか其産地阿波國勝浦郡海中津田澳の産にして此砂價貴きこと皆藍の發色を益せるに資れり此砂を洗砂と稱も其砂を清水にて洗ひ乾し絹の篩に

て疏(トホ)し藍に和せ凡藍百貫に砂四十貫を和せ藍
十分の四を法とす一升の量凡四百匁あり
按に是砂中鐵を含む者にして其色を褪(アセ)さら
しむる者なるへし我東京河中の砂（隅田川下流の者）
亦用ゐるに堪へたるへし都下塩蔵の茄子を
販く者或ハ鐵醬を加へ或ハ鐵釘銕屑(センシツ)を加へ
て其色を青翠ならしめ年を逾えて青色鮮明
なり然れとも其精好なる者ハ銕を加へせ河
中の砂に塩を加へて醃し石を以て壓せ銕臭
なくして其色青翠愛せへし蓋亦砂の力に頼

稱佳園稿箋

る他日河沙を以て藍を試むとす
上の如く藍砂を混し水を噴き其後水を流くを
許さす（春者水あれハ春易きを以て動もすれハ水を加ふ努力渇に堪へさる者ハ別に水
を與ふ然れとも竊に水を啣ミ藍上に流く者あり管者之を撿して嚴禁す其色を損するを以て
なり其艱想ふへし）只杵の尖(サキ)のミ水に潤し（初臼中濕布にて拭ふ其他水
を禁す）て春くなり殊に精好なる者ハ一臼を春く
に三日を經へし春者三四十人一の高座を構へ
一人其上に坐し机(ツクヱ)を置き柝を以て机を撃ちて
音頭となる三四十の杵並ひ擧け並ひ春く慣習
の久しき一杵の先(タ)つ者なく一杵の後るゝ者な

し三日間噴く所の水一臼に一合五勺に過きれ」舂き終りて手を以て摶(マロ)め藍玉と為し之を筵の上に排らへ乾し麥稈にて厚き苫と織り米苞の如くし上の藍玉七五俵と為す

七五俵とは真の重量十五貫を一俵に作る又本俵と稱するは真量廿一貫を一俵と定む筵の上に徽號を書し四方竪縄中を三所縛す皆(カイ)掛(ガケ)風袋を合せての重量をいふ七五は十五貫六百より八百匁本俵は二十一貫六百より八百匁とは藍の一駄を二俵にして價を定むるに一駄を以て

す一駄百五十圓許の價なり

又藍を窖(ネカ)すに一の禁忌あり杷を以て反し水を洒く時慎て藍葉を踏むへからす若し誤りて踏まる時は杷を以て反しおくへし反轉する時も藍を除き地を踏えて之を避くへし足にて踏めは其所凝固しカブレと稱する者を生し又白色に變す是人の恐るゝ所なり足を藍の下に入れ土の面を揩(スル)ふ如くして足の指尖(ユビサキ)にて土を踏むへし

○本葉窖法 根に近き五七寸許前に斷りて別に晒しさる者あり次品とす

本葉の窖法は一床四百貫板の上に攤け水を洒

国立国会図書館　タイトル『製藍集説』 請求記号 特1-1870
ガラス使用

くこと前に同し凡水を洒くに微々之を潤し四クマ鍬にて反轉すること亦上に同し水の量荷桶に八荷許を本葉百貫の料とし且百貫の水并せて三十二荷を用ゐるなり右の水を且洒き且反轉して偏く潤おし寝藏に入る三間に四間の内に藍葉を攤け戸窓を閉ること前に同し五六日にして二番水を洒き荷桶に九荷或ハ十荷を用ゐ杷鍬にて反轉し又六日許を經て第三次の水を洒く亦九荷許反轉前の如くして筵を以て掩ふ筵三枚を重ね用ゐるなり又六日許を過き

稱佳園稿箋

て第四次の水を洒く荷桶八荷許反轉數遍之を中心に抓き聚め上よりも筵を覆ひ四方よりも掩ひ纏ふへし又六日許を經て第五次の水を洒く此時ハ荷桶七荷に減す其頃已に十月十一月に際しさる時ハ寒サの度に準して筵の數を倍すへし又六日許を經て第六次の水を洒く此第六次の時貯へさる藍塵(アヰゴミ)を和すへし所謂藍塵とハ藍を擊つ時庭上に筵を敷き其筵の間に落ち又筵を敷きて簸るとき其筵外に飛散し其罅隙に入る者等掃ひ集めさるを

日々の積る所皆カマスに貯へ之を馬に駄し流川にて洗ふ（阿波にては吉野川にて洗ふ土佐より出る大河にして所謂四國次郎なり）貲布（サヨミ）の袋に盛り人々水中に入りて之を揺し手にて揉み清流に汰して洗へば塵土皆盡きて藍葉の碎粉のみ残るを木綿布の袋に移し口を括り板をしきて其上に載せ板を上に置き八貫或ハ十貫許の鎮石（オモリ）を置くこと數箇之を榨り馬に駄して帰り本葉第六次の水を洒く時其中に混ぜへし

藍塵を遍く撒（フリマキ）て本葉を并せ四百五十貫と為せ

稱佳園稿箋

（初本葉四百貫に藍塵五十貫を和せ）之を鍤（スキ）にて反し四ツクマにて墾し混和せしむ此第六次には水を洒くこと荷桶に六擔半を用ゐるへし又六日間を經て七次の水を洒く此時ハ水六荷を度とし四邊より中心に掻き集め上に筵を覆ひ横に筵を纏ひ縄にて纏ふへし又六日間を經て第八次の水を澆く此時ハ五荷に減せ反轉前の如く筵を纏ふ又六日を經て第九次の水を洒く四荷許にてよし後又六日を經て第十次の水を洒くへし此時ハ水二荷半亦藍の燥濕を撿し　を洒くそれより

又六日を經て第十一次の水を仕舞水とし反轉篩過并に前に同し筵を以て上を覆ひ傍に纏ひ縄にて巻き日を經ること一週日或ハ八日其水きれ藍の腐りさる度を候ひ其度佳ならハ即藍床を倒をつし（藍床を倒ふその語前に注す）縄を解き筵を取り又例の如く四ックマにて反し藍の欝蒸を放冷し其藍を席カマスに入れて重量を驗す此薬葉藍四百貫を窨し之に藍塵五十貫を和し合せて四百五十貫之を窨して薬三百十五貫略三割の耗なり

稱佳園稿箋

此薬を舂くに三百十五貫に砂百三十貫を和し一臼四貫砂一貫七百匁合せて五貫七百匁なり其始ハ杵にて搗り後に角杵にて舂くこと前の如し然れとも此ハ一日に二臼舂くを異なりとす一臼に水二升許を入れ舂くこと又大に前法に異なり舂き了りて丸となること亦前に同し俵に装に真の量二十一貫筵に裹み之を縛して其重量二十一貫六七百匁あり

○二番藍窨方

二番藍を窨るにハ一床一番藍に同しく三百五

十貫を定とし只六次の水の時塵藍(コミアヰ)を錯ふるを
異とし其板上に傾け出して水を洒くこと百貫
に水七荷の量にて三百五十貫に水二十四荷を
用ゐるなり又半荷を加ふるもよし其水且澆き且反轉し四ツ
クマを以て上下轉換せしめ偏く潤ふを佳とし
之を窨倉(ヌセクラ)に移し窓戸を閉ること前の二方に同
し是法ハ七日八日間を經て第二次(ニトメ)の水を洒く
四ツクマにて反し鋪にて鋤くこと皆前に同し二
次の水ハ七八荷藍の水燥くを度として洒くへ
し此時ハ猶堆積せを平に攤けてあるへし三次

稱佳園稿箋

の水ハ六日許を經て水を洒く然れとも枯燥(ミツキレ)た
る時ハ五日六日を經ても日に拘らし洒くへし
第三次の水ハ七荷許猶藍を攤け布く又五日許
を隔て丶第四次の水ハ六荷或六荷半を洒く杷を
入れ反轉するヿと皆前に同し此度ハ上に筵を
覆ふへしよし古き筵之より漸々寒冷に趣くを以て
三枚四枚の厚サに筵を倍し又暖かなる時あらハ二
枚に減し五日許を經て第五次の水五荷を澆く
へし杷鋪常の如くし反轉數度にして此時より
藍を中央に聚め上よりも覆ひ傍よりも纏ひて

前の二法の如くして又五日六日を經て第六次水
を澆くこと其燥濕に由るべし水きれてあらハ
水六荷を洒く之を反して後堆を為し筵を被覆
すること前に同し又五日（此時ハ五日を度とし）にして第
七次の水を洒く此時麼藍を洗ひさるを加ふる
（麼藍洗方前に見ゆ）こと常に同し勉て反轉し混淆せしむ
べし此度ハ五荷の水を洒く此後又中央に堆し
筵を覆ふ又六日許を經て手をさし入れ水きれ
さるを候ひ水五荷半を澆き又翻轉すること前
の如し之を第八次の水とし又五日を經て第九

稱佳園稿箋

次の水を洒き反轉し四荷半の水を洒く又五日
を經て第十次の水を洒くこと三荷反して後竹
篩にて篩ひ又五日を經て第十一次の水を洒く
こと一荷半許之を數度に洒き鍤を以て反し再
中邊に集め筵にて掩ふ其後六日許を經て終（シマヒ）の
水を洒く第十二次なり荷桶一荷の水を洒き常
の如く反し筵にて傍を纒ひ上を覆ひ縄を繞ら
して七八日其まゝに放置し時々其欝蒸を候ひ
覆を去り之を翻轉して冷ますこと皆同し
此藍初窨のとき三百五十貫第七次の水の時

国立国会図書館　タイトル『製藍集説』　請求記号　特1-1870
ガラス使用

藍壓五十貫を加ふ合せて四百貫となる蒁(スクモ)と為りて二百七十貫許之を舂く時砂二貫を入る

此二番藍ハ一臼舂(ヒトウスツキ)とし一臼ニ水一升五合許を入れ（尤舂く毎ニ度々少許を入るゝなり）舂き成して之を丸じ此藍玉真の量二〆一貫皆掛一貫六百八百匁許あるへし

附藍玉試法

藍玉を小刀ニて削り茶椀中の水を滴し手ニてむし揉ミ藍軟ニなるを溲(ユ)ねて細長ニし其尖(サキ)を

稱住園稿箋

紙ニ點し幾種となく此の如くして是を藍玉の手板と稱し此青色を見て之を買ひ之を賣るなり

阿波國阿波郡香見村

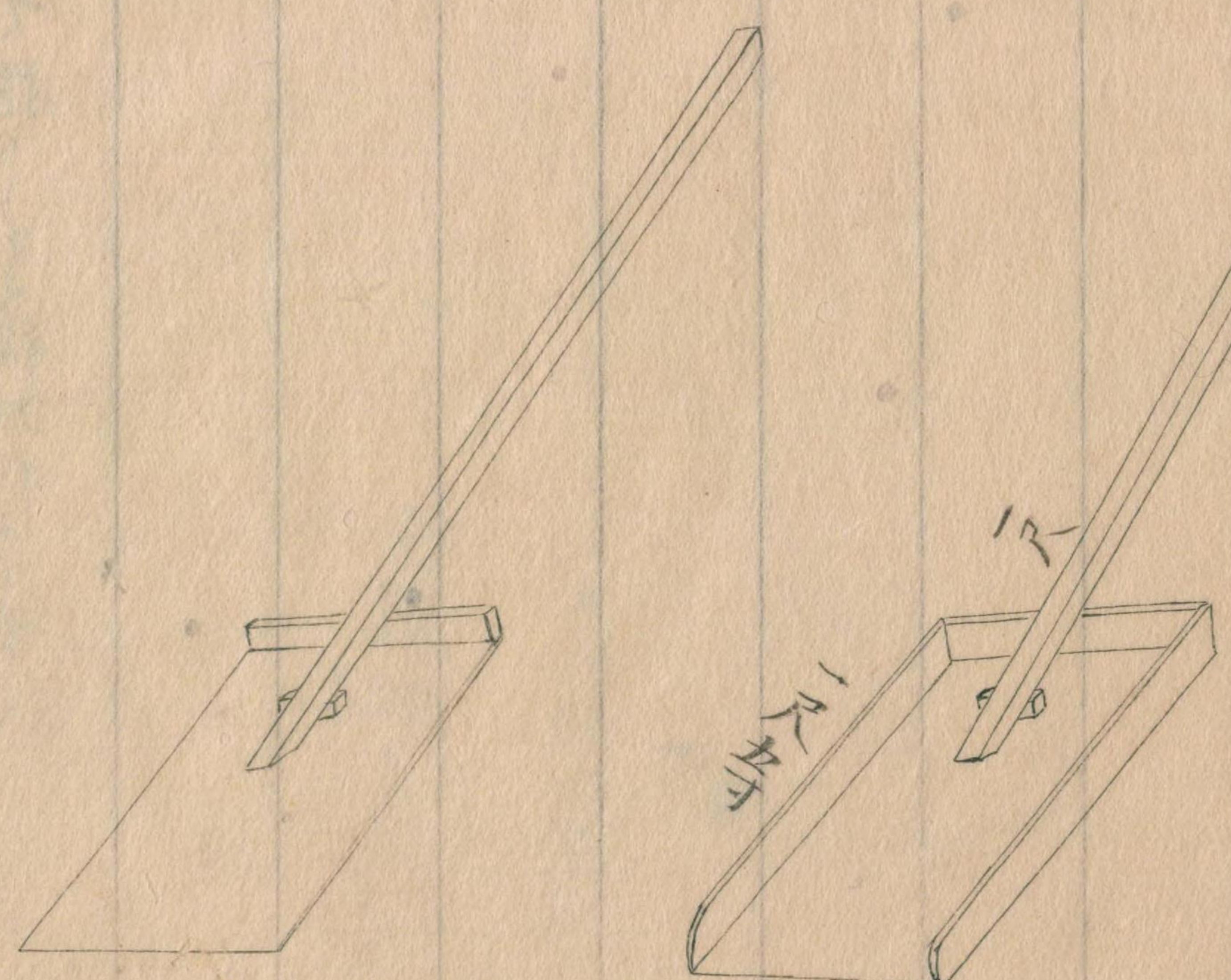
那須富輔原稿

榊原芳野輯録

○製藍畧圖

四ツクマ

四歯の杷なり全體鐵にて作るハツクマ之に準ス



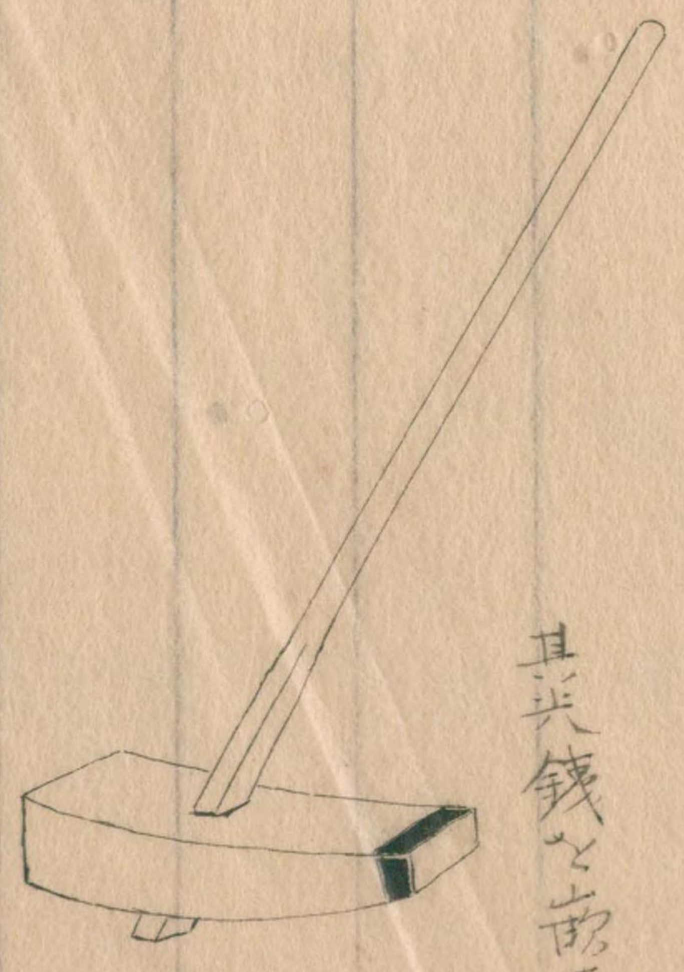
巻中鋤と称する者なり
両辺箱の如き又扁き板にて
作る者並ひ用ゆるあり

稱佳園稿箋

国立国会図書館　タイトル『製藍集説』　請求記号　特1-1870
ガラス使用

搗藍杵

常の杵を以て摺りたる後此杵にて舂く



稱住園稿箋

稱佳園稿箋

国立国会図書館　タイトル『製藍集説』　請求記号　特1-1870
ガラス使用

特1
1870

国立国会図書館　タイトル『製藍集説』　請求記号　特1-1870
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『製藍集説』　請求記号　特1-1870

ガラス使用